

120周年記念バッグ（通称「お茶高バッグ」）の誕生と若干の考察

石 出 みどり

本校には通学靴、シャツ、靴下、通学靴、体育着などに特別の指定はない。生徒が各自自由に選択し、使用している。制服はブレザーとスカートが指定されているが、規定・規格に添えば業者製のもののほか手作りのものも認められている。

したがって2003年春、自治会執行部の発案・企画で学校名・校章入りの通学靴、「120周年記念バッグ（通称「お茶高バッグ」、以下「お茶高バッグ」）」が誕生し、多くの生徒に受け入れられたのは、まったく新しいできごとであった。本稿はその成立と現在に至るまでの過程を、若干の考察とともに記録・報告するものである。

1. 「お茶高バッグ」の誕生

(1) 自治会執行部の動き

まず、2003年度自治会執行部部長（2年生）による「『お茶高バッグ』の由来」からはじめたい。

「お茶高バッグ」の由来

2002年冬、自治会執行部はお茶の水女子大学附属高等学校の創立120周年を記念して、以前から要望が出ていた「お茶高バッグ」の作成を企画した。まず、1、2年生に自治会で自主的にバッグを作成する企画についてアンケートをとると、多くの生徒（約150名）がバッグの製作を希望していることがわかった。そこで再度1、2年生に形、色、デザインに関するアンケートをとり、デザインなどが決定された。そしてこの企画が教官会議で承認され、デザインに芸術科の吉村先生の協力も得て、カバンが製作された。

「お茶高バッグ」が製作された背景には、1882（明治15）年以來の創立120周年の年に自治会執行部で記念となる大きな仕事をしたかったこと、学校名の入ったカバンが欲しいという生徒の意見が以前から非常に多かったこと、お茶高生の装いになんとも統一性がないと感じられていたことなどがある。

「お茶高バッグ」はいわゆる学校指定のバッグではなく、以上のような経過を経て自治会執行部が生徒の要望をもとに自主的に製作し、誕生した。

2003年2月10日

お茶の水女子大学附属高等学校 2002年度自治会執行部長 ××××
(以下執行部2年生4名、1年生5名の氏名)

本校は1882(明治15)年に創立され、2002年11月23日、創立120周年を祝う記念式典をおこなった。そのころ、一部生徒の間で「お茶高バッグがほしい」「学校でお揃いの通学鞆が欲しい」という声が聞こえていた。年明け、3学期がはじまると執行部が動き出し、通学鞆の製作、販売を企画し、学校名や校章の有無、鞆のデザイン、本体と持ち手の色、注文先などをアンケート調査で決定した。しかしホームルームや合議会の討議を積み重ねて決定するという、自治会の組織を生かした動きには至らなかった。

教員がこの企画を知ったのは、アンケート調査が行われた12月のはじめである。校章と学校名が記された物品、4,000円近い高額な商品の製作・販売を生徒(自治会)が行なおうとしていることについて、教官会議で検討、審議することとなった。

(2) 教官会議

12月半ば、教官会議で当時の指導部長より経過が報告され、生徒が製作を依頼したH商店は学校から徒歩圏内にあり、附属小学校でのランドセルや帽子の購入経験から生徒がその店を知っていたこと、アンケート調査によると1、2年生計159名(66%)がこの鞆の購入を希望していることなどが伝えられた。

本校ではこれまで校章や学校名入りの物品の製作・販売をしていないが、意見交換の結果、①創立120周年を記念しての限定製作・販売として認めること、②自治会の製作なので、プリントされる名称を「お茶の水女子大学附属高等学校」ではなく「お茶の水女子大学附属高等学校自治会」を示す英語の名称、“Ochanomizu University High School Student Council”に変更すること、③学校名入りの物品に高値をつけ販売する市場もあることなどから、販売は生徒ひとりに1点に制限することとして承認された。またデザインについて美術科教諭の協力が得られることになった。

こうして教官会議の承認を得て、自治会執行部は鞆を発注した。卒業をひかえた3年生はこのできごとに関わらず、注文もなかった。2月10日製品が届き、3,780円で執行部が販売した。この価格は商店からの売値である。

(3) 新1年生

4月、入学式の数日後、「お茶高バッグ」の件で新入生に混乱が生じていることが発覚した。

前述のとおり、「お茶高バッグ」は2002年度に創立120周年を記念して作成されたもので、新入生は入手

できないはずである。ところが教員は知らなかったことだが、本校に進学する附属中学校の3年生からも執行部が注文を受け付けたため、新入生の中にも「お茶高バッグ」を持っている生徒が生まれた。さらに入学後「お茶高バッグ」を求める者が、商店を訪ね個々に注文した。学校がそれに気づいたときは30個ほどが注文済みで、すでに製作中であることがわかった。このため校章・学校名が記された鞆の製作・販売に関する公的な権利の保護が、至急必要となった。また新入生の中に「お茶高バッグ」を持つ者と持たぬ者が生まれ、不公平と見られる事態が生じた。

混乱の原因は鞆に関する一切を発案・企画した執行部の生徒が行い、教員が関わらなかったことにある。前者の問題については商店に苦情を入れ、今後注文の受け付け、製作、販売は教員を通したの以外は行なわないことを口約束させた上で、商店に勝手な製作・販売をさせないため、書類の作成を急いだ。この点については弁護士で本校教育後援会副会長のY氏にたいへんお世話になり、5月末に商店と覚書を交わすことができた。

後者については指導部会で検討し、「①製作者である自治会執行部が新入生にお茶高バッグを紹介し、希望者から注文を集める→②指導部が現金を預かり、商店に発注、支払いをする→③執行部が生徒にバッグを渡す」という流れと方法、そして来年度以降も新入生への販売を認める方向で行きたいと教官会議に提案することがまとまった。

執行部の生徒たちも新入生と商店の予想もしなかった展開に驚き、商店が無断で自分たちの作ったデザインの鞆を再び製作・販売したことを怒った。そして個人では勝手に注文できないことを、1年生各クラスに説明して廻った。

教官会議では今年度1年生への追加販売と来年度以降新入生への販売について審議された。そこで、鞆の作成にともないトラブルはあったものの鞆自体は認められるものであること、以前は本校生徒の中に他校の鞆を持つ者がいたが、「お茶高バッグ」の出現以後それが見られなくなったことなどから、今後の製作・販売が認められた。その際新入生の注文の紹介、受付、引渡しなどは執行部の生徒が行なうが、商店との折衝、現金の管理、支払いなどは指導部の教員が行なうことも確認された。

6月、執行部が注文を受け付け、2週間後58名の1年生に渡すことができた。

2. アンケート調査から

自治会の企画で「お茶高バッグ」が製作され多くの生徒に支持されたことから、2003年2学期、全校生徒につきのようなアンケート調査をおこなった。

アンケートの回収状況

1年生	2年生	3年生	全体
107/121人 (88%)	105/113人 (93%)	111/118人 (93%)	323/352人 (91%)

以下の質問項目の数字 (%) は、回収された回答 (総数322人) の中での割合を表している。

(1) あなたは「お茶高バッグ」を

	1年生	2年生	3年生	全体
A. 持っている	84人 (79%)	90人 (86%)	75人 (68%)	249人 (77%)
B. 持っているが今は不要と思う	0人 (0%)	1人 (1%)	0人 (0%)	1人 (0.3%)
C. 持っていない	20人 (19%)	13人 (12%)	34人 (31%)	67人 (21%)
D. 持っていないが今は欲しいと思う	3人 (3%)	1人 (1%)	2人 (2%)	6人 (2%)

(2) お茶高バッグを使用しない場合、通学時にどのようなバッグを使っていますか？

- ・市販の「お茶高バッグ」と同形の通学カバン (スクールバッグ) …多数
- ・リュック…多数
- ・コムサ、ボーイズ、イーストボーイ、PORTERのカバン
- ・布製の手提げカバン、トートバッグ、他校のカバン、大きいスポーツバッグ、中学のカバン、肩掛けバッグなど

(3) 価格 (税込み3,780円) は

	1年生	2年生	3年生	全体
A. 適正である	80人 (75%)	74人 (70%)	69人 (63%)	223人 (69%)
B. 品質の割に高価である	15人 (14%)	28人 (27%)	27人 (24%)	70人 (22%)
C. 品質の割に安価である	4人 (4%)	0人 (0%)	3人 (3%)	7人 (2%)
回答なし (「わからない」を含む)	8人 (7%)	3人 (3%)	12人 (11%)	23人 (7%)

(4) 他に学校名入り、校章付きの物品があるといいと思いますか？

	1年生	2年生	3年生	全体
A. 思わない	92人 (86%)	83人 (79%)	92人 (83%)	267人 (83%)
B. 思う	14人 (13%)	12人 (11%)	15人 (14%)	41人 (13%)
回答なし (「どちらでも」を含む)	1人 (1%)	10人 (10%)	4人 (4%)	15人 (5%)

例えばそれは何ですか？

- ファイル、ペンケース、ノート、シャープペンシル、ボールペン、下敷き
- ネクタイ・リボン、Yシャツ、靴下、紺のハイソックス、体育着
- 携帯電話のストラップ、キーホルダー (「以前何かの記念に作ったものを見て、いいなーと思った。」、お弁当箱

以上の調査結果から、製作を進めた2、3年生、その後入学した1年生ともに7、8割の支持があることがわかる。価格も他の鞆、バッグと比較して、概ね納得がいくようである。私立学校では利益を上

乗せして1万円以上の価格をつけ、指定鞆として販売するところもあると聞くが、本校では前述のとおり学校を經由して商店に支払う代金の価格である。

(5) 最後の大切な質問です。バッグ、体育着などに見るように、本校には学校で指定する物品はありません。また学校名、校章付きの物品を用意することはありませんでした。そのため今多数の生徒がお揃いのバッグを持っている風景は、ちょっとした変化、新しい現象です。

あなたはなぜ本校生徒に共通のもの、学校名・校章入りのものを欲しい、持ちたいと思いましたか？
自分は購入していない人も、この点についてあなたの考えを聞かせてください。

全学年を通じて圧倒的に多い回答は、断然「お茶高が好きだから」「学校に誇りがあるから」「愛校心があるから」である。

- ・お茶高が大好きだから。そしてお茶高生であることを誇りに思うから。
- ・お茶高が大好きなので、お茶高関連のものならいっぱい欲しいと思ったからです。

その思いは「お茶高生の証し」「お茶高生としての誇りを示したい」、「自覚」、また「お茶高アピール」や不愉快な思いをしないで済ませたい気持ちにもつながる。

- ・皆このお茶高のことが大好きで、自分がお茶高生である証し、あるいはその誇りを示すものが欲しいと思っているからではないでしょうか。街でも「あ、お茶の水…」と言われるとうれしい。
- ・浦和一女や開成の人が持っていて、「ブランド」みたいで憧れたから。お茶高生だとアピールできるから。
- ・制服に特徴がないので、「どこの学校？」という眼で見られるのが嫌だから。
- ・文化祭などでどこかの学校に行った時、お茶高の制服だけだとどこの学校かわからないけれど、バッグを持っていればお茶高生だとすぐわかるから心強い。
- ・お茶高生の自覚がわく。実感する！

この点について、1年生の思いはより強い。

- ・我が校への誇りとして持ちたい。
- ・頑張って入った学校だから、特別なものが欲しかった。
- ・入りたくて入った学校を証明できるものが欲しかったから。
- ・死ぬ思いで入った高校だから。もっとお茶高グッズがほしいです。
- ・持っている自信がつくから。お茶高生であるという実感が湧くから。
- ・自分もこの学校の生徒の一員であると、連帯感や誇りをもつことができるため。
- ・高校受験組としてはお茶高入学はすごく嬉しく、同時にすごい誇りなのです。今もちろん入学したことを誇りに思っています。家にいる時でも、お茶高グッズがあると自信が持てるんです。自

已満足かもしれないけれど、そのようなグッズは高校入学したものとしてはすごくありがたいものです。今後も機会があるならお茶高グッズを作ってもらいたいです。

そして、「先輩たち」の影響もある。

- ・先輩たちが持っているのに憧れたから。
- ・先輩たちが持っていてかわいかったから。
- ・先輩が使っているのを見て、私も入学したら記念に欲しいと思いました。

一方購入しなかった理由は、持ちたい理由の裏返しとなる。

- ・学校名が外から見てわかるのは、私はすごく嫌。「自分はお茶高生なんだぞ」と自慢しているみたいで私は嫌です。
- ・なぜ学校名をバッグでアピールしたいのか、よくわかりません。せっかく個性豊かな学校なのに、みんなが同じ格好で同じ物を持っているのは気持ち悪い。でもみんなに統一願望があるなら別にいいと思う。
- ・学校名があからさまにわかるのは嫌。
- ・束縛される感じがしたから買いませんでした。

知られたいような、知られたくないような、微妙な気持ちがある。商店から聞いたことだが、執行部は学校名や校章の色をわざわざ目立たない色で指定したそう。

- ・校名がローマ字で、パッと見てではわからないと思ったので買った。

3年生の場合、購入しない理由は「今持っているものが充分使えるから」「1年生だったら購入したかもしれない。」「自分が1年生の時にあったら買っていたと思う」という時期的なものがある。しかしどの学年からも出る「皆と一緒につまらないから自分は買わなかった」も、少数だが重要な理由である。

- ・他の人と同じものを持つのが嫌だから。
- ・あまりにも統一されているのは軍隊みたいで好きではない。
- ・私はみんなと同じが嫌だから買いませんでした。たしかにバッグが一緒になって、少し変な感じがありました。
- ・そんなに欲しいと思っていないし、せっかくお茶高は個性が認められているのに、みんなが同じになってしまうのは抵抗があると思って買わなかった。でも、バッグのレアさとプレミアを考えるとあとから欲しくなった。でも、手に入ってもたぶん使わないです。持っているだけ。リュックを使い続けます。
- ・最近うちの学校の方は髪も染めるし、全体的に一般的な女子高生になりたがっている感じがする。

学校名入りバッグを持つのもその表れではないでしょうか…。

「お揃い」支持派は、次のように書いている。

- ・統一感がほしいから
- ・仲間意識!!
- ・カッコいいから。お茶高生という責任感がわく。
- ・同じ学校の生徒であることがわかるものが欲しかった。
- ・お茶高生としての証しが欲しい。みんなと共通のものをもちたい。
- ・皆でお揃いだと楽しいから。
- ・なんだかんだ言って、仲のよい友だちと同じものを持っている「おそろ」というヒビキは何だかうれいしいものです。
- ・自分がお茶高にいたという記念みたいなものが欲しかった。皆お揃いなのがよい。電車の中で同じバッグを見ると、「あら後輩かな？」とか思えてちょっとうれしい。
- ・持ってみると学校の外でもお茶高生がすぐにわかって、連帯感を感じた。シンボルって感じがうれしいと思った。
- ・お茶高はとても自由でシャツやソックスはそれぞれ皆違うものを使っていて、他の学校の人から見ると全く別の学校の生徒に見えてしまっていたので、何かひとつ、いつも身につけるもので、皆と同じものを持ちたいと思いました。
- ・多くの学校で指定のバッグがあるのに、うちの学校には無くて寂しかった。同じバッグを持つことでお茶高生としての意識も高まり、一方友だちとの一体感も得られた。高2の途中で使える期間は短いと思ったが、買ってよかったと思う。
- ・「私はこの学校と、学校のみなとつながっているんだ」と感じたい人が欲しいのだと思う。ただ現在使っているバッグでよい、あるいはみんなと一緒にものは嫌だと思う人もいるので、今のよように欲しい人だけ購入というスタイルでよいと思う。
- ・①ある集団に属しているという安心感から [帰属意識] ②お茶高に誇りがある [愛校心] ③お茶高という名を誇りに思いすぎ、電車の中などで見せびらかしたい。例えば慶応のバッグがよい例 (?) [一種のブランド意識] などから。

生徒たちが言う「本校には統一性がない」「統一感が欲しい」という主張は、このアンケート結果を見るまでよくわからなかった。しかし「統一感」とは連帯感や一体感のことなのだとわかり、また学校外では生徒たちが同じ学校の生徒同士であることを確認しづらいのだということも知った。卒業後は後輩を確認した時いっそう愛着を感じるだろう。体育祭や文化祭、部活動で共通のTシャツやユニフォームを着るノリのようなものも感じられる。

しかし何といっても重要なのは、学校に指定、強制された持ち物ではなく、生徒自身が作ったものであり、各自に買う・買わない、使う・使わないの自由が任されている点である。

- ・学校が好きだし、制服でもあまりどここの学校かわからないから。卒業した後も取っておきたくなるカバンだと思う。ただ、購入するかどうかは自由だという点はすごく重要だと思う。「お茶高バッグ」の良さのひとつでもある。
- ・強制されるのは嫌だけれど、自由に選べたし、ひとつくらい皆と共通のものがあってもいいかなと思って購入した。だからといってこれ以外には作らなくてよい。
- ・バッグくらいは統一性があつた方がよいと思ったから。でも強制的に使わなければいけないとか、は嫌です。
- ・お茶高に入った記念っていうのが大きいです。バッグがあつたからといって、それにとらわれず強制ではなくて自分の意志で持っている、選んだというのがいいです。

「強制でないからよい」「カバン以外はもう作らなくてもよい」ということを、多数が強く主張している。そしてまた大きな理由は、「かわいくて、大きくて、使いやすそうだから」「デザインがよかったから」である。

- ・学校で共通のものだからというよりは、今回は自分たちで決め、バッグのデザインもよかったから買った。前に使っていたものよりも気に入っているから使っている。デザインがよくなかったら学校名が入っていても使わないし、ほかのお茶高グッズを持ちたいとは今は思わない…。
- ・私たちに何度も意見を求めて作ってくれて、意見を反映したバッグだと思ったし、かわいいから。
- ・執行部のメンバーが製作に携わるということで、きっとデザインも持ちやすいものになるだろうと思った。
- ・グレーのバッグがほしかったから。
- ・制服の色に合う良い色だったから。
- ・制服にあうし、市販のものはダサイから。
- ・サイズも大きくて使いやすそうだから。記念になりそうだから。グレー&ブルーでかわいいから。
- ・今まで使っていたバッグが小さく、大きめで使いやすそうだったから。
- ・デザインがかわいいので買うしかない!!って思って。
- ・デザインがステキ?だし、バッグを選ばなくてもいいから。

つまり、「便利でデザインもよしいし、バッグが揃っていると実用的で、お茶高生の一体感がある気がする」からということのようだ。

生徒たちは大きく重い鞆で通学している。リュックの使用者が多いのもこのためである。「たくさん入るから」という理由はとても多かった。

- ・前に持っていたバッグは小さかったけれど、「お茶高バッグ」は容量が大きいから
- ・こんなに何でも入るバッグはなかなかありません。便利です。

そして1年生を中心に、「バッグを選ばなくてもよいから」という理由も目立った。

- ・自分でバッグを探し、選ぶのが面倒だったから
- ・決まっていると、ある意味で楽だから。
- ・他のものを買うのは面倒くさかった。
- ・バッグを選ぶのに苦労していたから。
- ・自分でおしゃれなバッグを探すのはめんどろだし、きっと3,780円以上かかるから。
- ・一緒ならひとと比べたり自分の持ち物をどうするか悩んだりする必要がなくなるから。

「記念になるから。思い出になるから」という理由もまた多い。この「記念」とは「創立120周年」と「在学」と両方ある。

- ・思い出、記念
- ・今しか買えないと言われたから。
- ・せっかく記念に作ってあるのだから欲しいなと思った。
- ・120周年という記念の年に自分がこの学校に通っていたことが貴重だと思ったので。
- ・記念にするため。あまり「お茶高」ってものがないから、欲しかった!!
- ・卒業後の記念になるから。きっと、すごく良い思い出の品になると思う。
- ・共通のものを持ちたいと思ったことはない。ただちょうどバッグを買い換えようと思っていたし、色や大きさが気に入ったので買った。記念になるからひとつくらいあってもいいかもしれない。
- ・簡単に言うと他校がうらやましかったから、自分の学校を誇っているようなバッグがうらやましかったからだ。それと記念になるようなものも持ちたかった、というのも理由のひとつである。
- ・共通だから、学校名が明記されているから持ちたいと思ったわけではない。ただ本校生徒だけしか持っていないので、持っている人が少ないというのはひとつの魅力だった。色、デザインによっては買わなかったかもしれない。あと120周年記念というのがレアだと思った。

「私はこれからもお茶高バッグが作られるのは許さない。レアだからいいのだ」という一回だけの限定販売（当初の計画）という稀少性や、卒業後は使わない（使えない）鞆であること、親の勧めなどの理由も複数あがった。

- ・レアだから。
- ・今しか持てない、お茶高にいる間しか使えないというのに弱かった。
- ・高校生気分を満喫できる!?
- ・誘われたから。

- ・母に「記念に買っておけば？」と勧められたから。デザインも気に入ったから。
- ・親が欲しがっていたから。

冒頭の執行部の「お茶高バッグの由来」は製作意図として、①120周年を記念する仕事をしたかった、②広範な生徒の強い要望、③統一性がほしいの3点をあげていた。調査により「生徒の強い要望」の具体的な中身、また「連帯感」「一体感」を欲してのことだとわかった。アンケート結果を簡潔にまとめると、以下のようなものである。

- ア、学校が好きだから、誇りがあるから
- イ、本校生徒としての自覚を持ちたい、さりげなくアピールをしたい
- ウ、一体感・連帯感がほしい、本校生徒だとわかる
- エ、自治会が自主的に作ったものだから、強制でないからよい
- オ、色、デザインがよい、かわいい
- カ、大きく使いやすい、実用的
- キ、自分で探さずにすむ、皆と同じは楽だから
- ク、記念、思い出になる
- ケ、その他

2003年4月15日の朝日新聞家庭面に、『『なんちゃって制服』増殖、『制服』異変 女子高生は今』と題する記事が載った。服装が自由な高校で、制服風の私服や他校の制服を着る「なんちゃって制服」が流行っている、管理の象徴であった制服が自己演出のファッションになっている、と女子高校生の制服観が変化していることを指摘するものだ。女子高校生のあいだでは制服もどき、制服に似た服装を好んで着る風潮があるという。

今回の「お茶高バッグ」も学校の指定鞆のようであり、実はそうではないところが支持された。また支持理由に「今しか持てないから」「高校生気分を満喫できる」という声があるが、服装や持ち物で高校生らしさを意図的に自己演出する心理は、記事とつながる。記事は女子高校生のこの「制服もどき」人気の裏に、「イーストボーイ」などの女性用アパレルメーカーが若者ファッションの一分野として「制服」ファッションに力を入れていること、少子化にもかかわらずそれが10億円の市場になっていること、ティーン向け雑誌と積極的に提携していることを伝えている。「イーストボーイ」は調査で現在使っている鞆のメーカーとして、本校生徒も複数あげた。

「お茶高バッグ」を作る過程を、体育祭や運動部でチームのTシャツを作るノリのようにと先述した。学校名や校章に対する感覚がこれまでとは少しちがってきているようだ。制服に対しても学校の指導どおりきちんと着なくてはならないもの、正式な場にも学生として通用する公的な服装という考え方はなくなり、自己表現のファッションのひとつとなろうとしているのだろうか。また、「高校生らし

さ」を演出しようという点も気にかかる。その「高校生らしさ」とは、いわゆる生徒指導で求めるものと同一ではない。どこかで作られた「高校生らしさ」という型に嬉々としてはまり、大勢の他者と同じであろうとするのはなぜだろう。その「高校生らしさ」は誰のイメージする「高校生らしさ」なのだろうか。また男子高校生の場合はどうなのだろうか。

記事は調査会社が「なんちゃって制服」の広がり気づいたのは2002年のことだ、と伝えている。「女子高校生であること」は3年間だけの一種のブランドで、その商品価値を彼女たち自身がよく知っている、とも書いている。その「商品価値」とは何なのか、生徒たちはどう意識しているのだろうか。

このアンケート調査によって、生徒たちが「お茶高バッグ」をほしいと思う理由が示された。「指定なし／自由」であることに満足しないのはなぜか、それも示された。そして生徒たちはバッグが強制、指定でないことが重要だとも強く主張している。しかし一方、記事の指摘する「高校生らしさ」の演出もしたいようだ。

「お茶高バッグ」の誕生にあたり教員の対応は少々遅れたが、無軌道、混乱に至らずにすんだ。しかし自治会活動としては、生徒の意見を組織的に積みあげまとめていく機会を充分生かすことができず、残念であった。この点を今後のための反省としたい。

3. 「お茶高バッグ」の今後

2004年3月、前年5月の会議での承認をうけ、新入生説明会で通学鞆の指定はないが希望者は自治会が作成した通学鞆を購入できる、という簡単な説明をおこなった。4月、新入生オリエンテーションで自治会執行部から誕生の経緯と購入の方法の説明をした。2004年度は「お茶高バッグ」ができて2回目の春であり、使用する学年としては4学年めである。希望者はどれぐらいになるのだろうか。「お茶高バッグ」の今後はこの数量とともに検討されていくことになると思われる。

最後に、3月の餅つき会の折、校庭に置かれた蒸し器の焚き火が強風で飛び、ベンチに置かれた1年生ふたりの「お茶高バッグ」を溶かし、穴を空けてしまった。このため卒業間近の3年生に協力を求めたところ、早速2名が鞆を届けてくれた。今後は使わないとは言え、思い出の品である。生徒、担任ともども感謝している。

